

関係性精神療法セミナー
日本における関係精神分析

このセミナー・シリーズは、2011年に第1回が開かれ、今年で第16回目を迎える。関係精神分析（関係論、関係性理論、関係性精神療法）は、対象関係論、サリバン派、コフト派、間主観性理論、自我心理学などを包括的に含み、現代のアメリカの精神分析の新しい流れを総括するものである。これまで当セミナーでは、エナクトメント、無意識的空想、治療者の脆弱性、ジェンダー、臨床技法、性愛性など、精神分析の根幹に関わるテーマを取り上げ、基本に立ち戻りつつ、その考えを再検討してきた。

今年のテーマは「日本における関係精神分析」である。関係精神分析は横井公一のスティーブン・ミッチェルの著作の翻訳などをはじめとして早くからその導入が試みられた。私たちグループも「関係精神分析入門」「関係精神分析—自己開示と倫理」（いずれも岩崎学術出版社）などの著書を発表してきた。

関係精神分析は、グリーンバーグとミッチェルの対話に始まり、主に米国を中心に発展してきた。日本語を話す私たちは、いわばそれを翻訳し、紹介し、臨床や議論の中で用いながら「輸入」してきた。日本語で述べられるそれは、どんな関係精神分析なのだろうか。理論や概念を異なる言語の中で用いるとき、そこには必然的に変容やずれが生じる。この文化的対話は何を意味するのだろうか。そして関係精神分析という文化は、日本語の臨床の中でどう生きるのだろうか。

関係精神分析は、文化の問題と切り離して考えることができない。それは、主体が浮かび上がるのは、つねに他者との関係の文脈、さらには言語・規範・価値・物語・ジェンダーといった文化的文脈の中においてであるととらえるからである。日本における関係精神分析の発展のためには、私たち自身が行ってきた「輸入と対話」そのものを振り返り、考察することを欠かすことはできない。

以上の認識を踏まえ、当日は吾妻は「世界の精神分析、日本の精神分析」、岡野は「甘え理論の先駆性と今日的な意味」、長川は「精神分析と禅：E.フロムと鈴木大拙が共有したもの」、富樫は「関係精神分析と文化的交流」というテーマで発表する。

初学者にとっても、臨床経験豊かな治療者にとっても、精神分析の治療者としての自分を振り返る上で役に立つだろう。当日は、アンケートなども用い、参加者と積極的に対話を進めていきたいと考えている。

参考文献：

吾妻壮 著（2018）『精神分析的アプローチの理解と実践』（岩崎学術出版社）

富樫公一著（2025）『分断の中の治療者—当事者性と倫理的転回』（岩崎学術出版社）

- ◆ 日 時：2026年7月5日（日曜日）午前10時～午後3時
（進行具合により多少の延長も考えられます）
- ◆ 開催形態：全面的にオンライン（Zoom）で行う
- ◆ 発表者：吾妻壮（上智大学）・岡野憲一郎（本郷の森診療所）・富樫公一（甲南大学）・長川歩美（A&C中之島心理オフィス）
- ◆ 司 会：岡野憲一郎、富樫公一、吾妻壮
- ◆ 受講料：5,000円
- ◆ 定 員：60名
- ◆ 申込方法：下記のURLまたはQRコードよりお申込みください。

<https://forms.gle/HDzBuZyJRa751E5J8>



- ◆ 問い合わせ：小寺財団事務局 kodera.fps@gmail.com
- ◆ 申込期間：2026年5月5日(火)～6月21日(日)